

蘭溪道隆の出身地についての考察

——蘭溪という道号を踏まえ——

館 隆 志

はじめに

蘭溪道隆(一一二一—一一三三—一一七八)は、鎌倉中期の渡来僧であり、鎌倉建長寺の開山として広く知られている。その果たした役割は極めて大きく、鎌倉後期にはすでに日本に禅が弘まる契機になったと理解されていた¹⁾。ゆえに、鎌倉末期に著された伝記を始め、いくつもの伝記史料が存しており、僧伝の蒐集や、灯史の編纂において、必ずといってよいほど道隆の伝記は収録されることとなった²⁾。

禅僧の伝記は、基本的に中国で編纂された灯史という僧伝史料の形態に基づいているため、僧侶の名前を記した後、解る限りにおいて出身地が記載されることが基本である。当然、道隆の伝記にも出身地が記されている。

道隆の出身地については、江戸期までの道隆の伝記史料が、そのほとんどが「西蜀涪江」として表記していたため、当該地が道隆の生誕地として知られていた。ただし、後述するように通称で「円鑑図」と呼称される賛文の中で「蜀の蘭溪に生まる」と記され、あるいは建長寺所蔵「西来庵修造勸進帳」³⁾の中で、道隆を「大唐蜀の蘭溪の人なり。尊号亦た蘭溪」と記していた。

しかしながら、この史料が提示された以降も、道隆の出身地として「蘭溪」と記した伝記史料はなかった。あくまで、基本的には道隆の出身地は「西蜀涪江」として理解されていたのである。一方、建長寺に残る史料からは、建長寺において道隆は西蜀の蘭溪の出身として伝承、あるいは理解されていたとみられる。

近代に入り、禅宗史の研究の中で建長寺や蘭溪道隆の研究が行なわれるが、全体的にみれば決して多くの研究がなされてきたわけではない。蘭溪道隆についても、その人物に焦点をあてて研究した人に後述する今井福山氏がおり、また唯一総合的な成果として、高木宗鑑『建長寺史—大覚禪師伝—』⁵が存しているのみである。

この「建長寺史—大覚禪師伝—」の中で、道隆の出身地を「西蜀涪江」と理解した上で、『大清一統志』卷三—三に「涪江故城」と記された場所を指し、それは四川省綿陽の近くに当たる場所であると推定している。⁶そして、その場所を今井福山氏が示した「蘭溪邑」⁷であると記したのである。その後、四川省綿陽にほど近い「蘭溪邑」が道隆の出身地として、理解されていくこととなった。ちなみに、綿陽に涪江が流れており、かつ「西蜀涪江」という表記と、綿陽からそう遠くない成都の大慈寺で道隆が得度したという記事から、一見ただけでは地理的な矛盾点がみられない綿陽説は、そのまま受け継がれていくこととなる。

このような認識がそのまま伝えられていき、道隆は、四川省綿陽の近く、「蘭溪邑」の出身という認識が、つい最近まで一般的であった。この情況に変化を与えたのが、拙稿「蘭溪道隆の靈骨器と遺偈」⁸であり、道隆の靈骨器に刻まれている銘文こそが、道隆の最も古い伝記史料であることを指摘した。この靈骨器には、数百年前から忘れられていた道隆の遺偈が刻まれているなど、極めて貴重なものであった。のみならず、そこでは道隆の出身地を「西蜀涪江」と記していたのである。

この靈骨器は、江戸期に発見され、銘文の内容も刊行されていたため、公表されていたものではあったが、当時は「西蜀涪江」と「西蜀涪州」の相違は問題にされなかったらしい。しかしながら、この靈骨器の記述は、道隆の叙後

一年で刻まれており、また、その際には同郷出身の義翁紹仁（一一二七—一一八二）が存命中であることから、地名についての記述は後の伝記史料よりも正確と考え、前掲拙稿においてその相違を重視して考察したのである。

その結果、綿陽の辺りを「涪州」と述べている記述は存しなく、現在でいう重慶市涪陵区の辺りを「涪州」と称することが確認された。「西蜀」というのは四川省の別名であるため、重慶市というところと少しばかりの違和感がある。しかしながら、これは現在の行政区分であり、かつては重慶市は四川省に含まれ、また「西蜀」とも称していた。そのため、最も古い伝記史料にある「涪州」の表記を重んじる必要性を挙げたのである。

この際、共に『蘭溪和尚語録』の訳注を作成していた彭丹氏に助言を求め、中国における調査をお願いすることになった。日中比較文化の研究者である彭丹氏は、重慶市の出身であり、最も相応しい研究者であったためである。それらの成果は、彭丹「涪州行—蘭溪道隆の生地をたずねて」として発表されており、日本に居ては決してでき得ない、貴重な成果となっている。

「蘭溪邑」の問題点と俗姓「冉氏」

これまでの「蘭溪邑」というものについての問題点を提示してみたい。この「蘭溪邑」というのは、今井福山氏の説に基づき、その記述を受けて『建長寺史—大覚禪師伝—』の中で、おおまかな所在地を検証している。これが、その研究としての嚆矢であった。

ところが、この今井福山氏の著述以前には、「蘭溪邑」という記述は、一つも存していないのである。今井福山氏は、この「蘭溪邑」の出典を明記はしていないが、恐らく「大覚禪師の九州開法時代の建長寺古記録は先年の関東大震災に罹りて殆んど埋失し去り」とある「古記録」が出典を記したものと思われ、それらの史料類は関東大震災で全

て埋失してしまったという。しかしながら、建長寺には江戸期に確認された文書・宝物もほほそのまま伝わっている¹⁴し、その他にも震災前からの数多くの文書・宝物が伝来している。今井福山氏の閲覧した史料のみが、全て埋失してしまったことになるという問題が存しているのである。

このような、今井福山氏の一連の著述・研究に疑義を呈したのが小栗隆博氏¹⁵であり、今井福山氏の一連の著述・研究に際して提示した史料群が、実際にはもともと存在していなかったものである可能性が高いことを指摘したのである。そのため、この「蘭溪邑」という記述そのものに疑義を呈する必要性が生じたのである。

『建長寺史—大覚禪師伝—』が刊行された時点では、今井福山氏の研究は、建長寺や道隆の研究において数少ない成果であった。そのため、『建長寺史—大覚禪師伝—』は多くの点でそのまま無批判に今井福山氏の説を取ることとなった。その結果、他の道隆の伝記史料には、まったく記されていないさまざまな記事が収録されることとなったのである。¹⁷このようなものの一つが、道隆の出身地を「蘭溪邑」とする記事であり、結果として「西蜀涪江」の「蘭溪邑」を探すことになったのである。

しかしながら、そもそも「蘭溪邑」と表記する明治以前の史料は、一つとして存在していない。また、最古の伝記史料に「西蜀涪州」とあり、それが重慶市の辺りを指すのならば、そもそも綿陽の辺りですらないわけである。

このような状況を鑑みれば、以後の研究においては、この「蘭溪邑」という表記については、簡単に用いるべきでないことは明白である。

かつて、建長寺では西蜀（四川省）辺りにあると想定された「蘭溪」の調査を中国に依頼したことがあった。建長寺の第一回「大覚禪師遺蹟巡拝団」が昭和五十七年（一九八二）に始まるから、その頃のことであっただろう。昭和六十一年（一九八六）の第五回「大覚禪師遺蹟巡拝団」の際に、重慶から五時間、舟で山峡下りをして「涪陵」に案内されている。現地案内役が不在であったため、舟からは下りず船上のみであったようだが、少なくともこの時の

一団は、「西蜀涪江」という記事から、現地の人たちに四川省重慶市涪陵（現在の重慶市涪陵区）に案内されているのである。当時は四川省であったが、重慶市は平成九年（一九九七）に直轄市になっている。このように、実際にはこの時点で、中国の人たちは「西蜀涪江」という記事から重慶市の「涪陵」に辿りついており、建長寺もそれを認識していたのである。

その後、建長寺はさらなる調査を願い、当地に調査の依頼の手紙を出していた。その手紙を受けて、涪陵の地誌研究者である蒲国樹氏が調査をすることになった。しかしながら、その後の調査結果について建長寺に伝わることはなく、彭丹氏が中国における調査をした際に、はじめて涪陵区にて調査されていたことが解ったのである。

ところが、平成元年（一九八九年）に刊行された『建長寺史—大覚禪師伝—』では、涪陵に案内されたことを知りつつも、綿陽の辺りであろうとする見解を提示され、以後、この綿陽説は建長寺の公式見解として理解されるようになる。その結果、建長寺内で伝えられた「涪陵」という地名を外部の研究者は知るすべを持たず、研究者も綿陽説を建長寺の公式見解として理解するようになってしまったのである。

『建長寺史—大覚禪師伝—』より前に綿陽説を唱えたものが無いことから、おそらくはこの説を受けてのことであろう。建長寺では綿陽の辺りにあるとされた「蘭溪邑」を探すこととなった。そうして、のちの「大覚禪師遺蹟巡拝団」では、綿陽のそばの「蘭溪」という小さな小川に案内されたとのことである。結果として、この場所こそが道隆の出身地として認識され、研究者もそれを伝え聞くことで綿陽の辺りが道隆の生地であると理解したのである。

道隆の俗姓を「冉氏」という。「畫骨器銘之写」にも「冉氏」とあり、『元亨釈書』をはじめ、すべての伝記史料で「冉氏」と記されている。⁸⁾ そもそも、道隆は『蘭溪和尚語録』の中で「冉和尚」と述べているように、⁹⁾ 門弟たちにとっても、道隆が「冉氏」であったことは、周知のことであったとみられる。ちなみに、この時には、案内された綿陽の辺りの「蘭溪」の近くには、「冉氏」の一族は残っていなかったという。

道隆の出身地と「涪州」について

そこで、「涪州」という記述から、道隆の出身地と想定された重慶市涪陵区の辺りに目を向けてみたい。以下、彭丹氏の調査を参考にさせて頂いた。

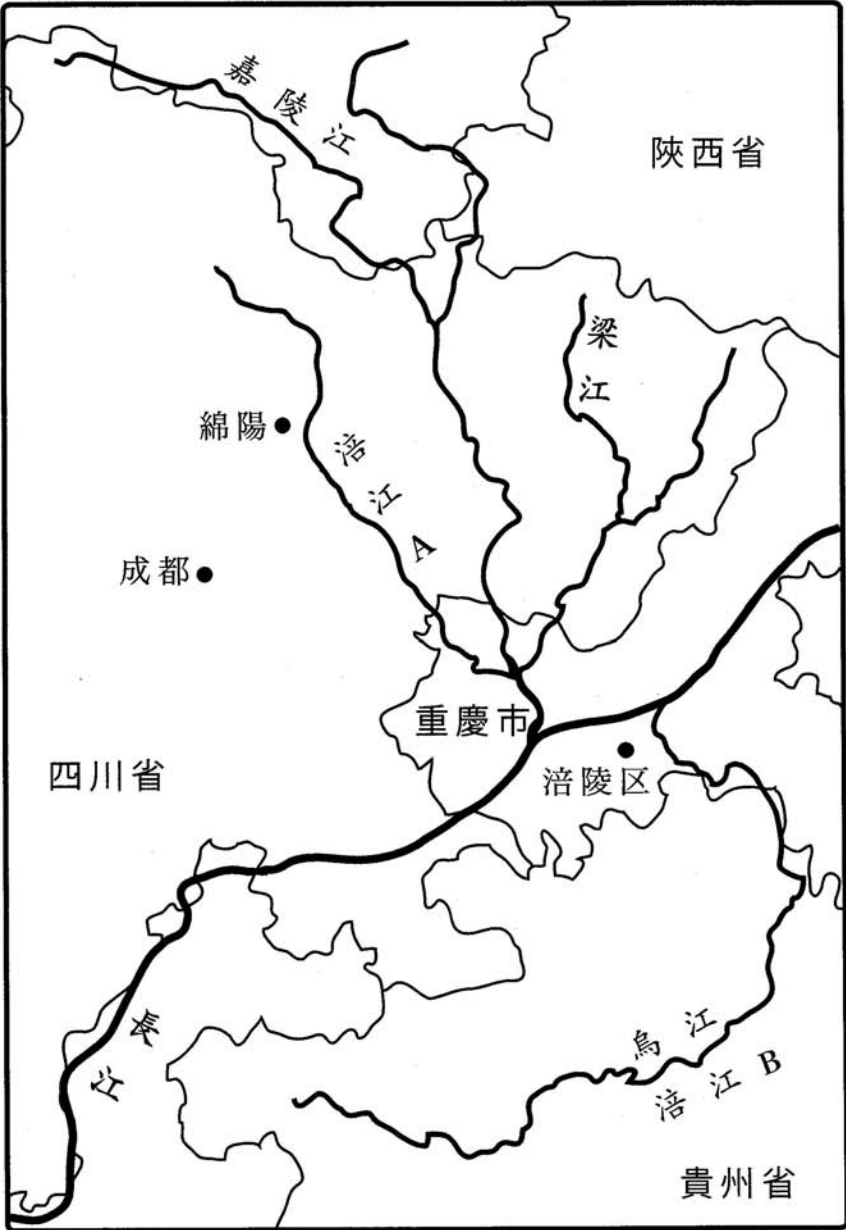
前述の研究史に追加すべきこともあるが、「靈骨器」に関する論文発表の経緯から、彭丹氏が中国における調査を行なうこととなった。この調査で、はじめて中国において道隆が如何なる理解をなされているか知ることとなったのである。

それは、道隆の出身地として、日本では「西蜀涪江」という記述と、「建長寺史―大覚禪師伝―」の説を受けて、綿陽の辺りという認識が一般的であったが、中国では重慶市涪陵区の辺りとして認識されていた。日本と中国の認識が異なっていたのである。

これは、前述の建長寺の調査にさかのぼるが、中国では事前の情報に基づいて、「西蜀涪江」という記述から「涪陵」を建長寺に示していた。しかしながら、その後には「建長寺史―大覚禪師伝―」が刊行され、涪陵説を載せることなく綿陽説が採られた結果、日本においては綿陽説のみが知られるようになっていったのである。

日本人が「西蜀涪江」から綿陽の辺りの地名と推定した理由は、前述した通りであり、また、道隆が「成都大慈寺」で出家し、綿陽には涪江が流れている以上、その近くであることは、正当性があると理解されたのであろう。

しかしながら、「西蜀涪江」の蘭溪が綿陽の近くという推定は、あくまで日本人の地理感覚に基づくものであって、その土地の人々は、この記述からそのようには考えなかった。そうして、「西蜀涪江」というのは、重慶市涪陵区の辺りだろうと考えられるようになったらしい。その成果は、日本では建長寺以外では生かされなかったのである。



そもそも、「涪江」という地名は極めて紛らわしい。現在、一般的に知られている「涪江」(涪江A)²⁰は、嘉陵江の支流であり、四川省北部から綿陽辺りを通り、嘉陵江に合流する全長七〇〇キロにも及ぶ巨大な河川の事を指す。「涪江」(涪江A)と嘉陵江の合流するこの場所を、河川が合わさる地名として「合州」と言うが、「合州」は後に「涪陵郡」に含まれ、現在の行政区分としては重慶市合川区となる。ちなみに、「涪江」(涪江A)が合流した「嘉陵江」も重慶の中心地で長江に合流する。

この「嘉陵江」が合流した「長江」は、その後、九〇キロくらい下流の涪陵(現在の重慶市涪陵区)で南方から流れる大きな河川と合流する。この河川は、現在「烏江」と言い重慶の南の貴州省から流れ涪陵区の辺りで長江に合流しているが、旧名を「涪江」(涪江B)という。²¹「涪江」(涪江B)と「長江」の合流する涪陵は、かつて「涪州」と称され、現在でも涪陵の別称は「涪州」と言うのである。

そもそも、「涪江」(涪江B)の流れる辺りは、巴国先王の陵墓が存していた場所であり、故に「涪陵」と名付けられた。ところが、その所在地は二千年以上の長い年月の中で、三度も変更されることとなった。²²

はじめ、「涪江」(涪江B)の東岸辺りに置かれた「涪陵郡」(宋代の紹慶府で、現在の重慶市彭水辺り)は、南北朝時代の宋において、その西岸に移る(宋代の涪州で、現在の重慶市涪陵区)。ところが、隋代にはさらに西に移り(宋代の合州で、現在の重慶市合川区)、そこで「涪陵郡」から「涪州」に名称が変更された。そして、変更された名称のまま再び唐代に東に戻り(宋代の涪州で、現在の重慶市涪陵区)、以後、「涪州」の地名が踏襲された。²³すなわち、かつて重慶市は四川省の行政区分であるが、その重慶市の中に二つの「涪江」があり、「涪陵」も二つあることになる。

したがって、歴史上、「涪陵郡」の呼称は、三カ所に存在しており、「涪州」の呼称は二カ所に存在していたことになる。涪陵郡と涪州の名称の遍歴を挙げれば左記のようになる。²⁴

重慶市涪陵区の辺りと導き出しているものがあることがわかった。「西蜀涪州」という表記から重慶市涪陵区を導き出した私とは異なり、「西蜀涪江」からであっても重慶市涪陵区を導き出していることは驚きであった。恐らく、日本人には解らない、その土地の人だけが知り得る感覚があるのだらうと思ひ、重慶市涪陵区と書くことを後押しすることとなった。

そして、彭丹氏の調査によって、現在の中国においては、道隆の生誕地が重慶市涪陵区の辺りであったらうと考えられていることを知ることになったのである。数十年の時を経て、中国と日本の研究成果が合致したのである。

重慶市涪陵の地誌研究者である蒲国樹氏にとって、道隆の出身地を涪陵区とする決め手となったのは、一九九八年に涪州（現在の重慶市涪陵区）蘭市から、南宋淳熙十一年（一一八五）に亡くなった冉隱君の墓志銘「冉隱君墓志銘」が出土され、道隆が西蜀に生まれた頃、確かにこの地方に「冉氏」が活躍していたことが確認されたことであつたといふ。すなわち、当時この地で冉氏が活躍していた痕跡が残っていたのである。ちなみに、蘭市にはこの今日も「冉」姓を持つ人たちが暮らしているといひ、また参考ながら、蘭市には「冉家沱」という地名がある。

「蘭溪」について

前述したように、道隆の道号「蘭溪」が、地名であることを明記する古い記録としては、建長寺に所蔵される、通称で「円鑑図」とよばれるものの一軸が挙げられる。この中に元僧の楚石梵琦（一二九六―一三七〇）の賛文が収録されており、

生_二蜀之蘭溪_一、即以爲_レ号。出_二宋之澗水_一、謂稱_二鮑參_一。姑蘇双塔見_三無明老人拳_二牛過窻櫺_一而透徹。廬山帰宗夢_二張公水部_一、願_レ身随_二瓶鉢_一以護持_上。得_二拄杖於異僧_一、感_二天童之護法_一。及_レ開_二日本巨福_一、王臣敬崇。屢

坐^二名藍道場^一、衲子^二罔邊使^一松源慧灯不^レ夜、播^二大覺遺教無窮^一。茶毘示^二末後涅槃^一、舍利入^二西來翠塔^一。囑^二平太守^一相^二見於鏡中^一、果睹^二聖觀音^一、每彰^二於身後^一。堂々大道、臺臺清規、付^二之的子親孫^一、仰若^二泰山北斗^一者也。日本国巨福山建長禪寺開山第一代祖、大覺禪師蘭溪道隆和尚遺像、遠孫比丘元志侍者求^レ贊。至正丙午春、嘉興路在城報恩光孝禪寺前住山楚石道人梵琦敬書。³¹⁾

〔訓〕蜀の蘭溪に生る、即ち以て号と為す。宋の洩水を出で、謂て飽參^{ほうさん}と称す。姑蘇の双塔に無明老人の牛過窓櫺を挙するを見て透徹す。廬山の帰宗にて張公水部を夢みて、身を瓶鉢に隨て以て護持せんことを願ふ。拄杖を異僧に得て、天童の護法を感ず。日本巨福を開くに及びて、王臣敬崇す。屢^{しばしば}は名藍の道場に坐し、衲子^{のついで}罔邊し松源の慧灯をして夜ならざらしめ、大覺の遺教を無窮に播^しく。茶毘するに末後の涅槃を示し、舍利を西來の翠塔に入る。平太守に囑して鏡中に相見するに、果して聖觀音を睹^みて、毎に身後に彰はる。堂々たる大道、臺臺たる清規、之を的子の親孫に付し、仰ぎて泰山北斗の若くなる者なり。日本国巨福山建長禪寺開山第一代の祖、大覺禪師蘭溪隆和尚の遺像に、遠孫比丘元志侍者贊を求む。至正丙午の春、嘉興路在城の報恩光孝禪寺の前住山楚石道人梵琦、敬て書す。

○洩水：浙水。現在の浙江省。○飽參：十分に会得すること。○姑蘇：現在の江蘇省蘇州市。○双塔：蘇州府城の双塔寺のこと。○無明老人：臨濟宗松源派の無明慧性(一一六〇～一二三七)のこと。○牛過窓櫺：「牛過窓櫺」の公案。³²⁾○廬山帰宗：廬山の帰宗寺のこと。○張公水部：祠山大帝のこと。○瓶鉢：瓶は浄水を入れる器。鉢は応量器で、僧侶が常に所持する食器のこと。ともに大乘仏教の比丘が常備すべき十八種の法具の一つ。○天童：明州(浙江省)鄞県の太白峰天童山景德禪寺のこと。○罔邊：周罔を回って礼拝する。敬意をもって囲む。○松源：臨濟宗虎丘派(松源派祖)の松源崇嶽(一一三二～一二〇二)のこと。³³⁾○無窮：果てしないこと。永遠。無限。○泰山北斗：泰山と北斗星のこと。大家として仰ぎ尊ばれる人。○嘉興路：浙江省の嘉興路のこ

と。○報恩光孝禪寺：杭州（浙江省）の淨慈寺のこと。

とある。これによれば、楚石梵琦は、日本からやってきた道隆の法孫、元志侍者の求めに応じて、至正二十六年（一三六六）に道隆が所持していた鏡の図に賛しており、この南北朝期の写しとみられるものが建長寺に伝わっている。

楚石梵琦は明州（浙江省）象山の人であるから、蜀の地名には詳しくはなかつたことであろう。日本僧からの情報に基づいて「生蜀之蘭溪」、即以爲「号」と記したとみられる。したがって、少なくとも南北朝期には「蘭溪」は出身地と理解されていたことが文献の上から確認できることになる。

また、蘭坡景菴（一四一九—一五〇一）の漢詩集『雪樵独唱集』四「説」の「大川説」によれば、九州肥後の大川・瀆という名の禪僧が、弟子を京都に使わして蘭坡景菴に自身の道号に因んだ「道号説」を求めたとのことである。この際、蘭坡景菴は、「大川」という道号に「川」字があることから、その漢詩中に「蘭溪」にまつわる話を例示している。あるいは大川瀆は大覚派の人なのかもしれないが、その詳細は不明である。ここにその記述を紹介してみると、

茲有諱瀆者、字之爲大川。其徒之以事來瀆者、携小軸要作説。輒告之。蠶叢氏之國、有山曰岷、有溪曰蘭溪、其水注而不已。自溪徂谷、自谷徂川、然後成名川者三百、成支川者三千、入于江之西、于湖之南、于海外扶桑之東、進沃日滔天之濤、何其蘭溪之盛如斯也耶。兩朝分身之師大覺祖、其地産而、取以爲稱、蓋慕蘭於臨瀆也。（後略）

〔訓〕茲に諱瀆という者有り、之に字して大川と爲す。其の徒の事を以て洛に來たる者、小軸を携えて説を作らんことを要す。輒ち之に告ぐ。蠶叢氏の國、山有りて岷と曰い、溪有りて蘭溪と曰い、其の水注ぐも已まず。溪自り谷徂まり、谷自り川徂まり、然る後、名川と成る者は三百、支川と成る者は三千、江の西、湖の南、海の外扶桑の東に入り、日に沃きて天に滔まるの濤進る、何ぞ其の蘭溪の盛んに斯の如くならんや。兩朝に身を分け

るの師、大覺祖、其の地の産にして、取りて以て稱と為す、蓋だし臨濟を蘭慕するなり。

○蠶叢：蜀王の先祖。蜀の地の異稱。○慕蘭：賢者を敬慕すること。司馬相如が蘭相如を敬慕したことから
 「史記」「司馬相如」。

とある。これによれば、蘭溪は蜀の溪であり、そこから名川となったのは三百、支流となったものが三千あったとされ、その水は日本の東まで届いたとある。これは、道隆が蜀から日本の鎌倉まで行って布教し、その門流が盛んになったことを踏まえた表現とみられ、これをもって蘭溪が如何なる溪谷であったかを知ることができない。しかし、「大覺祖、其の地の産」とあることからすれば、道隆を蜀にある「蘭溪」の産れと理解していることは確認される。五山文学を代表する一人の蘭坡景菴が、「蘭溪」を道隆の出身地として理解している以上、道隆の出身地「蘭溪」は中世禅林ではある程度は知られていた情報だったのかもしれない。

この漢詩中に、道隆が「臨濟」を敬慕したために「蘭溪」と号したと記されていることも興味深い。溥沱河に臨むことから臨濟と名づけられた臨濟院、その臨濟院に義玄が住したことから臨濟と号されたわけであるが、道隆は臨濟義玄を敬慕したことから、河川（溪）名に因んで「蘭溪」と名づけたと理解されているのである。この見解は他に見られないが、道隆の道号の伝承を示す事例の一つと言えよう。

その二つの史料の後に、「蘭溪」を出身地とする記録は永正十三年（一五一六）に記された「西来庵修造勸進帳」になる。建長寺西来庵を修造するための「勸進帳」に「蘭溪」が出身地と明記された以上、ある程度知られるきっかけになっただろう。ただし、江戸期の『新編鎌倉志』に楚石梵琦の贊文が収録されて刊行されたことから、『新編鎌倉志』によって道隆が「蜀之蘭溪」の出身として広く知られていたのではなからうか。

佐賀県の三間山円通寺には道隆が若訥宏弁に与えた道号頌が残っており、『円通寺文書』「大覺禪師道号偈」には、
 有道可レ稱レ名レ為二道号一。上古有徳之者、俱無二是理一。周金剛、因レ執三一条白棒二徳山一、号二徳山和尚一。臨

済因¹近²呼陀河建³立黄蘗宗旨⁴、号為⁵臨濟禪師⁶。豈似⁷今日良可嘆⁸耳。兄自⁹海教中¹⁰来、已諳¹¹深淺¹²。仍復¹³体¹⁴究西祖不伝之妙¹⁵、莫¹⁶輟¹⁷幼志¹⁸、終有¹⁹自得之時²⁰。先聖云、大巧若拙、大弁若訥。

法名宏弁、道号若訥。

凡安²¹法名并道号²²、須²³是上下理通万可²⁴。

〔訓〕有道は名を称して道号と為す可し。上古の有徳の者、俱に是の理り無し。周金剛は、一条の白棒を徳山に抛りて執るに因み、号を徳山和尚と為す。臨濟は呼陀河の近くにて黄蘗の宗旨を建立するに因みて、号を臨濟禪師と為す、豈に今日に良可と嘆くに似たらんか。兄、海教中自り来たり、已に深淺を諳んず。仍ち復た西祖不伝の妙を体究す。幼志輟めること莫く、終いに自得の時有り。先聖云く、「大巧拙の若くならば、大弁も訥の若し」と。法名は宏弁、道号は若訥と。

凡よそ法名並びに道号を安ずるは、須らく是れ上下理り通じ万可なるべし。

とあり、徳山にて接化した宣鑑が徳山と号し、臨濟院で宗旨を立てた義玄が臨濟と号した事例を紹介しつつ、先聖の「大巧若拙、大弁若訥」という言葉から、「若訥宏弁」と名付けている。道号を授ける際に、山名（山号）や寺名（寺号）を道号とする事例を紹介しつつも、先聖の言葉から「若訥」と名付けたわけである。

また、無隠円範には「古人、道既難¹掩、随²所安名。昔周金剛住³徳山、玄上座住⁴臨濟。初不⁵在⁶号而化被⁷於人⁸」と述べ、山名（山号）や寺名（寺号）をもつて道号を授ける事例を話しながらも、「苟有¹一毫之欺²、誠為³終身之患⁴」。故に「無隠二字」として、「一毫の欺」の無きように願って「無隠」と授けたことが記されている。

道隆が授けた道号頌としては若訥宏弁に対してのものと、無隠円範の法語が残っているだけであり、そこでは、ともに徳山や臨濟の道号について触れている。道隆の場合はいくまで「蘭溪」という地名が由来と考えられるが、円範に寺名・山名・地名ではない道号を授けることを踏まえ、あえて徳山や臨濟について触れたのではなからうか。

道隆の「蘭溪」は自ら名乗っていた「道号」であり、『蘭溪和尚語録』卷下「虚堂智愚跋文」に「自号蘭溪」とあり、また「靈骨器銘之写」にも「自号蘭溪」とあることから、これは当時の門弟にとって周知のことであったとみられる。したがって、少なくとも道隆には師匠から与えられた「道号頌」は存しないことになろう。

そのため、十分な史料や情報がないことになり、あくまで、楚石梵琦の讚文にある「蜀の蘭溪に生まる」という記述、蘭坡景藍の漢詩中に「蘭溪」と記した上で「其の地の産」との記述、「西来庵修造勸進帳」にある「蘭溪の人なり」の記述に基づいて出身地を考察する必要があるだろう。

一般的に「蘭溪」と言えば、婺州（浙江省）の蘭溪が知られている。⁶⁵ 古来の文献にたびたび登場する地名である。一方、西蜀涪州という地域の中に、蘭溪に該当する地名は、中国の古い文献や地誌を中心に管見に触れない。仮に「蘭溪」が蜀の地名であった場合でも、それは、当時においても広く名前が知られていたような場所ではなかったかもしれない。

「蘭溪」という地名から想像されるのは、「蘭」は蘭科の花であり、「溪」は山間の小川や、小川そのものも指し、あるいは谷すなわち「溪谷」を意味するものである。この意味を直接的にとれば、山中にあつて蘭が咲く小川や溪谷という程の景観を想像することができよう。「蘭」は中国では古くから愛でられた花であつて、これに符合するような地名は当時からも多々あつたことであろう。少しばかり古い中国の地誌をめぐっていけば、数多くの「蘭溪」を見つけることができる。

蘭溪を地名ではないかと考えるのには他にも理由がある。それは、蜀出身の僧侶で、恐らく河川の名前に基づく道号を用いたと見られる僧侶がいるからである。環溪惟一（一一二〇―一一二八）と石溪心月（？―一一二五四）を挙げることができよう。

環溪惟一は、資州（四川省）墨池の人であり、自ら「環溪」と号していた。⁶⁷ 資州には「環溪」が存在していること

から、地名に基づく道号かと推定される。また、石溪心月は、眉山（四川省）の人であり、眉山には「石溪」があることから、おそらくはこの地名をもつて号したものと想定されよう。

このように、道隆とほぼ同時代に活躍した蜀出身の僧侶が河川名を道号に用いていることからすれば、道隆が地名や河川名を道号に用いていたとしても、まったく不自然ではないのである。

ちなみに、禅僧には道号とは別に地名（ちみん）と呼ばれるものが存在する。禅僧の郷里や居所に因んでつけた別号のことで、通常の道号とは区別されている。道隆の「蘭溪」は地名（ちみん）ではないが、郷里に因んで名付けられた道号と理解される。郷里を号として用いる例は、数多く存在しているのである。

残念ながら「涪州」、すなわち、現在の重慶市涪陵区の辺りに蘭溪の地名や溪谷名を見つけることはできていない。あるいは、蘭溪とはそのあたりを流れる小川や溪谷の別称である可能性も想定されよう。

ちなみに、越州（浙江省）の蘭溪を、鎌倉から南北朝期にかけて活躍した禅僧、天岸慧広（一二七三～一三三五）が中国に留学した際に舟で通過している。この時、天岸慧広は「東帰集」「偈頌」に「過蘭溪次韻」と題して、

此行如下為賞春为上、水洗岸蘭香滿溪。

擬欲停舟題姓字、前程猶遠日方西。

〔訓〕此の行、春を賞えんが為に為すが如く、水は岸蘭を洗いて香り溪に満つ。舟を停めて姓字を題せんと擬欲せば、前程、猶お遠く日は方に西す。

と船上から溪谷に満ちる蘭のすばらしい香りを受けて偈頌を残している。蜀の蘭溪も、そのような場所であったのではないだろうか。

『蘭溪和尚語録』に見られる蜀の地名

道隆の語録を『蘭溪和尚語録』という。道隆の存命中に南宋で刊行され、示寂後の鎌倉後期に日本で再刊されている。南宋で刊行された宋版は残っていないが、覆宋五山版はいくつか残され、完全な形として残っているのは建長寺所蔵本のみである。⁵¹⁾

この『蘭溪和尚語録』には、いくつか蜀の地名に因む説法が登場する。

上121 上堂。文殊与_二維摩_一、両_二常論議_一。放_レ箭射_二虚空_一、專用_二没意智_一。西川石像大笑喧_レ天、東海泥牛望_レ空出_レ氣。(後略)⁵²⁾

〔訓〕上堂。「文殊と維摩と、両_二常に論議す_一。箭を放ちて虚空を射、専ら没意智を用う。西川の石像は大笑して天に喧しく、東海の泥牛は空を望みて気を出だす。

○西川石像：嘉州（四川省）の大仏。⁵³⁾

上160 上堂。石頭不_レ下_二釣魚山_一、一棹便透。臨濟纔登_二五峰頂_一、万指忙然。(後略)⁵⁴⁾

〔訓〕上堂。「石頭は釣魚山を下らずして、一棹に便ち透る。臨濟は纔かに五峰の頂に登り、万指忙然たり。

○石頭：臨濟宗楊岐派の石頭自回（不詳）のこと。⁵⁵⁾

○釣魚山：石頭自回の住した合州（現在の重慶市合川区）の釣魚山のこと。⁵⁶⁾

上168 上堂。此義深遠、吾不_レ能_レ説。黃面瞿曇、硬如_二生鉄_一。只如_二此義_一、有_二甚難_レ説_一。蘭溪為_二諸人_一、拳_レ揚此義_一去也。展起則四角六張、放下則七凹八凸。不_二展起_一不_二放下_一時、如何是此義。喝一喝、巴蓬果閩懷裏有_レ状。

〔訓〕上堂。「此の義は深遠にして、吾れ説くこと能わず」と。黄面の瞿曇、硬きこと生鉄の如し。只だ此の義の如きは、甚の説き難きことか有らん。蘭溪、諸人の爲に此の義を挙揚し去らん。展起せば則ち四角六張なり、放下せば則ち七凹八凸なり。展起せず放下せざる時、如何なるか是れ此の義」と。喝一喝して、「巴蓬果閩、懷裏に状有り」と。

○巴・蓬・果・閩：巴州・蓬州・果州・閩州はいずれも四川省内の地名。³⁷⁾

上 237 東光和尚至上堂。挙。臨濟訪^二德山^一。山見^レ来伴伴而睡。濟敲^二繩床^一一下。山云、作麼。濟云、且瞌睡。便出去。師云、德山老子抛^二一条白棒^一、横打堅打。尽天下人、不^レ奈^二何他^一。因^レ甚却放^二過臨濟^一。召^二大衆^一、鑑沱水急、銅柱灘高。成^レ人者少、敗^レ人者多。回^レ首銀蟾浸^二碧波^一。

〔訓〕東光和尚至上堂。「挙す、臨濟、徳山を訪う。山、来たるを見て、伴伴として睡る。濟、繩床を敲くこと一下す。山云く、『作麼』と。濟云く、『且つ瞌睡す』と。便ち出で去る」と。師云く、「徳山老子、一条の白棒に抛りて、横打堅打し、尽天下人、何を奈何ともせず。甚に因つてか、却つて臨濟を放過す」と。大衆を召して、「鑑沱水は急にして、銅柱灘は高し。人を成ずる者は少なく、人を敗する者は多し。首を回らせば、銀蟾は碧波に浸る」と。

上 238 上堂。道^二著第一義^一、齒冷唇寒。踏^二破上頭関^一、皮穿骨露。只如^下玄沙不^レ度^二飛猿嶺^一、回老不^レ下^中釣魚山上、還曾道得著、踏得破也無。良久、若教^二類下^一涙、滄海也須^レ乾。³⁸⁾

〔訓〕上堂。「第一義を道著せば、齒は冷やかに、唇は寒し。上頭の関を踏破せば、皮穿ち骨露わる。只だ玄沙が飛猿嶺を度らず、回老が釣魚山を下らざるが如きは、還た曾て道得著し、踏得破すや」と。良久して、「若し頻りに涙を下さしめば、滄海も也た須らく乾くべし」と。

○鑑沱水：西蜀涪州（現在の重慶市涪陵区）にある長江の入江。³⁸⁾

○銅柱灘：西蜀涪州（現在の重慶市涪陵区）の長江の江中にある灘。⁶¹

○回老：臨濟宗楊岐派の石頭自回（不詳）のこと。

○釣魚山：石頭自回が庵を結んで住した合州（現在の重慶市合川区）の釣魚山のこと。

跋文 宋有「名衲」⁶²、自号「蘭溪」、一筇高出於岷峨、万里南詢於吳越。

〔訓〕宋に名衲有り、自ら蘭溪と号す。一筇にて高く岷峨を出で、万里のかた吳越に南詢す。

○岷峨：四川省にある岷山と峨眉山のこと。⁶³

この中で、特に興味深いのが「鑑沱水」と「銅柱灘」であり、これらは「涪州」の地名である。特に、上237では、道隆は鎌倉東光寺からやってきた僧侶を前に、建仁寺で「涪州」の地名を出して説法していることになる。すなわち、この「東光和尚」は、道隆と共に来日し、同じく蜀出身の義翁紹仁ではないかと思われるのである。

義翁紹仁については、その詳細はあまりにも解らないが、⁶⁴『延宝伝灯録』卷十六の「相州建長義翁紹仁」伝には、

相州建長義翁紹仁禪師、宋国西蜀涪江人。随大覚禪師東渡、弁司諸職、投合其機。開法建仁・建長、盛唱大覚之道、晚屏居東山正伝庵、某年六月二日滅。賜諡普覚禪師。⁶⁵

とある。また、『本朝高僧伝』卷二十一「相州建長寺沙門紹仁伝」には、

釈紹仁、字義翁、宋国西蜀涪江人也。寛元丙午秋、随大覚禪師東渡、参叩精切、一旦廓爾徹法源、首于一会。初出世建長、後移建仁、盛唱大覚之道、学者四至、晚屏居東山正伝庵、以某年六月二日滅、賜諡普覚禪師。⁶⁶

とあって、義翁紹仁を「西蜀涪江」の出身であると伝えている。「西蜀涪江」の出身と明記する古い時代の史料が確認できないが、『扶桑五山記』「建長寺住持位」に、

〔四〕義翁禾上、諱紹仁、諡普覚禪師、嗣大覚、⁶⁷太宋西蜀人、宝治元年来朝。弘安四年辛巳六月二日寂、寿

六十五^⑤

とあり、「西蜀人」と記されている。

そして、東光和尚が建仁寺にやってきた際に、道隆が上堂に際して出した地名が「鑑沱水」と「銅柱灘」である。これは、義翁紹仁と久しぶりに再会したことで、義翁紹仁を前にしてあえて故郷の地名を出したのではないかと考えられまいか。説法を聞いていた建仁寺の僧侶たちは、初めて聞く地名であり、何を言っているのかまったく解らない状況であっただろうが、その説法は東光和尚である義翁紹仁にさえ伝わればよかつたのであろう。

ちなみに、その次の上堂に収録される「釣魚山」も、「涪州」に近い合州の地名であることは興味深い。この釣魚山は、石頭自回の話に際して登場する地名である。蜀（四川省）は名僧の産地であり、唐代から宋代にかけて多くの高僧が誕生している。しかしながら、蜀といった場合、極めて広大な範囲の土地を含んでいる。仮に現在の行政区分で見た場合であっても、四川省（485,000km²）と重慶市（82,300km²）を合わせただけでも（567,300km²）、日本の国土面積（378,000km²）の一・五倍もあるわけである。

したがって、道隆にとつて、故郷出身の僧侶といった場合であっても、より近くの出身者を身近に感じたに違いない。それゆえに、『嘉泰普灯録』に「涪州」辺りの出身者として登場する合州の石頭自回を身近に感じたのではなからうか。ほとんど無名の石頭自回が、『蘭溪和尚語録』に二度も登場することからしても、帰らぬ故国に思いを馳せていた様子が窺えよう。そのように考えると、上160に「釣魚山」と「石頭」が登場することからすれば、この日の建長寺で行なわれた上堂も、義翁紹仁と無関係ではなかつたのかもしれない。

『蘭溪和尚語録』に登場する地名、それも東光和尚が建仁寺にやってきた上堂で、「鑑沱水」と「銅柱灘」の名前を挙げたことは興味深い。「銅柱灘」は長江の「涪江」（涪江B）が合流する直前の江中にあり、「涪江」（涪江B）が長江に合流する手前の場所にあるのが「鑑沱水」であるためである。すなわち、「涪江」（涪江B）こそ道隆や義翁紹仁

の出身地と言えるのではなからうか。

おわりに

以上、道隆の道号「蘭溪」と、出身地の名前に因むと思われる「蘭溪」について考察した。本稿の目的は、出身地を特定するためではなく、これまでの研究史を整理し、道隆が綿陽辺りの「蘭溪邑」の出身であるとする説を否定することが主な目的である。その点については、十分に果たせたものと考えている。

また、涪江という河川、涪州という地名について整理を行なった。両方の地名が、蘭溪の伝記史料の中で、蘭溪の出身地として登場する名前である。しかしながら、現在の行政区分である重慶市の中に、「涪江」が二つあることがわかり、別称として「涪州」とも表記されることがあり、それぞれ「涪陵」とも呼ばれる地であったのである。

本論においては、隋代の「涪州」すなわち「涪江」（涪江A）、唐代の「涪州」すなわち「涪江」（涪江B）を比較した。道隆の時代であればどちらが相応しいのかを考えた場合、宋代に「涪州」と称されていた現在の重慶市涪陵区が、「靈骨器之銘」に記された「涪州」であったと理解すべきであろう。さらに、彭丹氏の調査結果などからは、その土地の人々が、「涪州」と言った場合には恐らくは「涪江」（涪江B）を指していたと思われるのである。

これを補強するのは、やはり『蘭溪和尚語録』巻上「建仁寺語録」の「東光和尚至上堂」であり、涪江にある「鑑沱水」と「銅柱灘」を同郷出身の義翁紹仁に提示したとみられることであろう。あるいは、道隆最古の伝記史料でもある「靈骨器之銘」に「涪州」とあるのは、義翁紹仁が存命中であることなどからも、現地の土地に詳しい人によって記されたからと言えるのではなからうか。

道隆の出身地「蘭溪」については、本稿にて場所を特定するには至らない。文献上は、涪州の涪江（烏江）の流れ

ている辺りとしかわからないためである。あるいは、涪江（烏江）の支流の一つ、あるいはその周辺に、蘭溪と呼称される河川があれば、それは道隆の出身地である可能性を高めるであろう。

道隆の出身地は西蜀、あるいは蜀である。この場合、かつて四川省の行政区分であった現在の重慶市をも含んでいる。西蜀（四川省）という表記が一般的であることからすれば、使用しづらくはあるが、蘭溪道隆は西蜀涪州（現在の重慶市）、あるいは西蜀涪州（現在の重慶市涪陵区）の出身と表記するのが妥当だと思われる。

（補記）本稿作成に際しては、法政大学非常勤講師の彭丹氏にご教授とご助力を頂いた。記して感謝申し上げます。

凡例 以下に関しては略称を用いる。

『大正新脩大藏経』—大正藏

『卍統藏経』新文豊出版公司—統藏

『大日本仏教全書』仏書刊行会—大日仏

『大日本仏教全書』鈴木学術財団—日仏全

『蘭溪道隆禪師全集』思文閣出版—蘭溪全集

『五山文学新集』東京大学出版会—五山新

注

- (1) 『雜談集』卷八(『雜談集』中世の文学、三弥井書店、一九七三年、二五七頁)に、「ことに隆老唐僧にて、建長寺、宋朝の作法の如く行はれしより後、天下に禪院の作法流布せり。時の至るなるべし」とある。
- (2) 『元亨釈書』卷六「釈道隆」(日仏全六二・一〇〇a~c)、『禪林初祖行狀』五「蘭溪和尚行狀」、『延宝伝灯録』卷三の蘭溪道隆章(大日仏一〇八・六四b~六七a)、『本朝高僧伝』卷十九「相州巨福山建長寺沙門道隆伝」(大日仏一〇二・二七九a~二八一b)など。僧伝史料については、榎本渉『南宋・元代日中渡航僧伝記集成』(勉誠出版、二〇一三年)を参照。
- (3) 僧伝に記された道隆の生誕地を列記すれば、『元亨釈書』卷六「釈道隆」に「宋国西蜀涪江人也」(日仏全六二・一〇〇a)とあり、『禪林初祖行狀』五「蘭溪和尚行狀」には、「大宋国西蜀人」とあり、『延宝伝灯録』卷三の蘭溪道隆章に「宋国西蜀涪江人」(大日仏一〇八・六四b)とあり、『本朝高僧伝』卷十九「相州巨福山建長寺沙門道隆伝」に「宋西蜀涪江人」(大日仏一〇二・二七九a)とある。
- (4) 建長寺所蔵「西来庵修造勸進帳」は、図録「北条時頼とその時代」(鎌倉国宝館、二〇一三年、九八頁)による。
- (5) 高木宗鑑『建長寺史—大覚禪師伝—』(大本山建長寺、一九八九年)
- (6) 『建長寺史—大覚禪師伝—』(二四頁)に、「現在の地図で示すと、四川省成都の東北に綿陽(綿州とも言う)という所があるが、これに最も近い地点で、「大清一統志」(卷三三三)に「涪江故城」と見えている所がそれである。この地は涪江河の上流に面している。蘭溪邑は、右の涪江(県)の管下の一邑と推定されるので、地図で示す場合は、現在の「綿陽」と殆ど同地点であろうということが明らかにした」と記している。ただし、嘉慶重修『大清一統志』卷四一四「綿州」では「涪県故城」とあるため、そもそも「涪江故城」ではなかったことになる。
- (7) 高木宗鑑『建長寺史—大覚禪師伝—』の中で、今井福山「大覚禪師の記事」(『正法輪』大本山妙心寺、一九二九年)の使用を明記しているが、同名の論文はない。恐らく、同年に出されている今井福山「大覚禪師と筑前博多の円覚寺(上・下)」

〔「正法輪」一六七・二六八、一九二九年〕のことを指していると思われる。以下、今井福山「大覚禪師の記事」とは今井福山「大覚禪師と筑前博多の円覚寺」と判断して論を進めたい。今井福山「大覚禪師と筑前博多の円覚寺」において、道隆の出身地を「蘭溪邑」と明記している。ただし、今井氏が参照したはずの「九州開法時代の建長寺古記録」は関東大震災で全て埋失したと記している。しかし、「九州開法時代の建長寺古記録」については、一切の関係記録が残っておらず、その記録を見ているのは今井福山氏のみということになっている。これと同じような経緯を持つものが戦国時代編纂とされてきた公案集『湘南葛藤録』である。今井氏は「大正七年来、同契院（建長塔頭）に蒐集していた古書類は同十二年九月一日同院に曝書中、震災に遭て大半埋失し殊に武士禅記の参考書類は倒壊家屋の下に在て雨水の浸潤する所と成り全部汚損」（『武士禅機縁集』崇福寺、一九二五年、二二頁）したというが、どうやら、『湘南葛藤録』もこの埋失史料群の中に含まれていたことになっているようである。小栗氏は「湘南葛藤録」そのものが今井福山氏によって創作されたものである可能性が極めて高いことを指摘し

ている（小栗隆博『湘南葛藤録』について）『曹洞宗研究員研究紀要』第四十号、二〇一〇年、二三〇―一八五頁）。ちなみに、今井福山「大覚禪師と筑前博多の円覚寺」には、多くの場合出典が記されていないが、この論のみに見られる記事については、今井氏によって創作された記事である可能性を十分に考慮しなければならぬ。不用意な引用は誤解を招くためあえて行なわないが、道隆が日本に來日するまでの記事は、そのほとんどが創作と判断される。なお、今井福山氏については、小栗隆博「謎の禅者、今井福山について」（駒沢大学大学院仏教学研究會年報」第四十三号、二〇一〇年、一七六―一五六頁）も参照されたい。

(8) 『元亨釈書』卷六「釈道隆」に「年十三薙髮於成都大慈寺」（日仏全六・二一〇〇a）とある。

(9) 拙稿「蘭溪道隆の靈骨器と遺偈」（駒沢大学禅研究所年報」二十二号、二〇一〇年、一九三―二四四頁）

(10) 元禄六年（一六九三）七月二十四日に、曹洞宗の僧侶である梅峰竺信（一六三三―一七〇七）によって刊行された『大覚禪師拾遺録』の「大覚開山塔」（大日仏九五・一一三）に、「靈骨器之銘」

- の内容が収録されて紹介された。
- (11) 『蘭溪道隆禪師全集』第一卷『蘭溪和尚語録』(思文閣出版、二〇一四年)
- (12) 彭丹「涪州行—蘭溪道隆の生地をたずねて—」(『鎌倉』第一一七号、二〇一四年、二五—四〇頁)
- (13) 今井福山「大覚禪師と筑前博多の円覚寺(上)」(『正法輪』一六七、一九二九年、八頁)
- (14) 江戸期に伝来していた文書や宝物については、その一部であるが徳川光圀の『鎌倉日記』(鈴木棠三『鎌倉紀行篇』、東京美術、一九七六年、九四—九五頁)や、その記録も参考にされて作られた『新編鎌倉志』(白石克編『新編鎌倉志』(貞享二刊)影印・解説・索引)汲古書院、二〇〇三年、九六—一〇九頁)に記載がある。そのうちの、ほとんどのものが建長寺に現今も伝来しているのである。
- (15) 小栗隆博「謎の禪者、今井福山について」(『駒沢大学大学院仏教学研究会年報』第四十三号、二〇一〇年)一七六—一五六頁
- (16) 『湘南葛藤録』は今井福山氏によって創作されたものである可能性が極めて高いものであったが、それを収録する『武士禅機録集』(崇福寺、一九二五年)に、『湘南葛藤録』と関係があるものとして挙げられている二十五の史料について、その全ての史料が「今井の記述中にのみ存する書物」で、その現物や写本が残っていないばかりか、目録等に記された情報さえも、すべて今井氏の著述が典拠であったという(小栗隆博『湘南葛藤録』について)『曹洞宗研究員研究紀要』第四十号、二〇一〇年参照。
- (17) 高木宗鑑『建長寺史—大覚禪師伝—』で、今井福山氏のみ独自の記事を採用した例はかなり多い。また、出典として用いられている史料の中にも、今井福山氏によって、道隆に仮託して作成された偽書が含まれている可能性がある。高木宗鑑『建長寺史—大覚禪師伝—』は、あくまで真摯に蘭溪道隆に対する研究を行なったものであり、そこに記された文章には一切の悪意はない。そして、現在においても、唯一の蘭溪道隆に関する総合的な成果である。しかしながら、前述の経緯から、その引用に際しては細心の注意を払わなくてはならない。
- (18) 『元亨釈書』卷六「釈道隆」に「宋国西蜀涪江人也。姓冉氏」(日仏全六二・一〇〇a)とある。
- (19) 『蘭溪和尚語録』卷上「建仁寺語録」上218(蘭

溪全集一・六〇a)

(20) 『重慶府輿地志』「山川」に「涪江。源出三松潘衛

東之雪欄山」、經龍安府江油県・彰明県綿州・

潼川府射洪県・大和鎮遂寧県、会諸水至三安

居廢県十里之隅寿舖入三合州界」(『中国地方志

集成・四川府県志輯』五、巴蜀書社、一九九二

年、四八頁)とある。

(21) 南宋代の地理志『輿地紀勝』一五九「合州」の

「風俗形勝」において「涪漢合流。州因以名」と

ある。

(22) 『統修涪州志』「涪陵江即烏江之下流矣(中略)与

蜀江会於涪州東云々(中略)江至涪陵其名

称各書不レ一。有レ称涪水及涪江者、不レ免

与三北道之涪水、涪江相混淆。有下因三其来レ自

黔中一称为黔江一者上。似下又与三烏江之名不中相

符上。今遵一統志、名为三涪陵江」(『中国地方志

集成・四川府県志輯』四七、巴蜀書社、一九九二

年、一三頁)とあり、「烏江」とは「涪陵江」の

下流であり、この河川は、涪江・涪水・黔江など

と呼称されたが、混乱をさけるために「涪陵江」

として呼称するとあるように、一つの河川に多く

(23) 『四川通史』卷二十六「涪州」に「華陽国志、県

在巴郡東四百里一治涪陵水会」。巴先王陵墓多

在レ此」とある。『華陽国志』卷一「巴志」には

「巴子時、雖下都三江州、或治三墊江、或治三平都、

後治中閩中上、其先王陵墓多在レ此」とある。

(24) 『四川通史』卷二十六「涪州」に「東晋、改三置

涪陵郡」。宋時、并涪陵郡、入三巴東其枳県一仍

属三巴郡」。齊志、復有涪陵郡属三巴州」。中興

元年、廢故帝宝卷為三涪陵」。王即此隋、仍枳県。

周廢、入三巴県」。又涪陵県、旧曰、漢平置三涪陵

郡」。開皇初、郡廢。十三年、県改。名唐初始三

於県一置三涪州」とある。

(25) 清代に出版された『四川通志』卷之二「輿地」

「四川通志」二、巴蜀書社、一九八四年、五〇四

頁)の表を参照して作成。

(26) 明代の『重修合州志』卷一に「隋、開皇末、改三

合州一曰三涪州」。煬帝置三涪陵郡」。唐、武徳元年

復為三合州」とある。

(27) 仏教系の史料においても顯著であり、『律相感通

伝』「又問、涪州相思寺側」(大正蔵四五・八七八

b)、『統高僧伝』二十五「涪州相思寺無相禪師

伝」(大正蔵五〇・五九a)、『広弘明集』「渝州西

百里相思寺北、石山上有仏跡十二枚」(大正蔵

五二・二〇三a)、『集神州三宝感通録』卷中「唐

渝州西百里相思寺北石山。有仏跡十二枚」(大正藏五二・四二二c)、『法苑珠林』卷十三「敬仏篇第六之二、觀仏部感應縁之余」に「唐渝州相思寺仏跡出石縁」(大正藏五三・三八七c)、卷十三「敬仏篇第六之二、觀仏部感應縁之余」に「唐渝州西百里相思寺北石山有仏跡十二枚(中略)相思寺因以得名、一云涪州」(大正藏五三・三九一b)、『地藏本願經科註』卷四「涪州相思寺古跡」(統藏三五・二九七a)、『新修科分六学僧伝』卷三十「隋無相禪師者」に「不知何許人、忽然見之涪州相思寺碌碌隨衆」(統藏一三三・四八一b)、とある。同じ相思寺であっても「涪州」あるいは「渝州」として表記されていることになる。時代とともに、その土地の呼称が異なっていることが確認される。

(28) 『蘭市古鎮』(蘭市古鎮編集委員会、二〇〇九年)

(29) 蒲国樹氏は、この辺りを道隆の生地かと想定した。蘭市は涪陵であり、涪江の河川からは十五キロほど西、長江の流域にある場所であるが、「冉隱君墓志銘」の発見によって、蒲国樹氏はこの辺りを蘭溪の生地と考えた。彭丹氏もこれを追認している。また、「冉家沱」なる地名があることも興味深い。しかしながら、「涪江」からは十五キ

ロと距離が離れているようにも思われ、また文献上でこれを証明し得る史料は一つもないという問題が存している。

(30) 円鑑とは、本来は道隆の墓所(開山塔)のことを指す。道隆の塔頭が西来庵で、その中でも開山塔(開山堂)を円鑑と呼称していたのである。道隆

の示寂後、道隆が所持していたとされる鏡に、觀音像、あるいは道隆らしき影が写っていたことから、道隆の所持の鏡は靈鏡の如く扱われることとなった。円鑑とは文字通り円なる鏡のことを指し、道隆が所持していた靈鏡は、全く円形ではないため、円鑑ではないのである。しかしながら、開山塔(開山堂)を円鑑と呼称するため、道隆が所持していた靈鏡が、「円鑑」と混同されてしまった可能性が存している。すなわち、誤用している可能性である。後世、この靈鏡を書写したものに、多くの禪僧が讀文を寄せたものが建長寺にも数軸が残っている。これを、現在には「円鑑図」と呼称しているのである。誤用の可能性はあるが、一応通用している呼称であるため、本稿ではそのまま「円鑑図」として用いることとする。

(31)

建長寺に所蔵される通称「円鑑図」については、図録『北条時頼とその時代』(鎌倉国宝館、

二〇一三年、九二頁)による。

(32) 蘇州(江蘇省)府城東南隅に存する双塔寿寧万歳禪寺のこと。唐代に般若寺が建造されたことに始まる。太平興国九年(九八二)に双塔が建立され、双塔寺と称される。東塔は舍利塔、西塔は功德塔。清代に重建され、現在に至る。

(33) 臨濟宗松源派の無明慧性(一一六〇～一二三七、または一一六二～一二三七)のこと。達州(四川省)巴渠の李氏。松源崇嶽の法を嗣ぐ。廬山の帰崇寺などを経て蘇州の陽山尊相寺・双塔寿寧寺に住した。法嗣に蘭溪道隆と顔汝勲(一齋居士)がいる。『無明和尚語録』一卷が存する。佐藤秀孝「無明慧性の活動と『無明和尚語録』—建長寺開山蘭溪道隆を育成印可した南宋禪者—」(『駒澤大學研究年報』第二十一号、二〇〇九年)参照。

(34) 「牛過窓櫺」の公案。水牯牛が窓の格子越しに通る過ぎていった時、頭も角も四本足も全て通り過ぎたのに、尻尾だけが通り過ぎることができない理由を問う公案。『心庵和尚語録』巻五「建康府蒋山太平興国禪寺語録」の「径山大慧禪師至上堂」によれば、楊岐派の仏眼清遠(一〇六七～一一二〇)が五祖法演に参じた時、法演が示した

たとえ話として「我為_レ你說_二箇喻子_一。正如_下一人牽_二一頭牛_一從_二窓櫺_中過_上、兩角四諦悉皆過了、唯尾巴過不_レ得」(統藏一一〇・四二一b・c)と示されているのが最も古い。『無門闕』第三十八則「牛過窓櫺」に「五祖曰、譬如_二水牯牛過_二窓櫺_一、頭角四諦都過了、因_二甚麼_一尾巴過不_レ得。無門曰、若向_二這裏_一顛倒、著_二得_一一隻眼、下_二得_一一転語、可_下以上報_二四恩_一下資_中三有_上。其或未_レ然、更須_レ照_二顧尾巴_一始得。頌曰、過去墮_二坑塹_一、回來却被_レ壞。者些尾巴子、直是甚奇怪」(大正藏四八・二九七c)とある。

(35) 江州(江西省九江市)の廬山に存する帰宗寺のこと。瞻雲寺とも。東晋の咸康六年(三四〇)に、右將軍の王羲之が邸宅を改めて寺とし、インド僧の達磨多羅を住せしめたことにはじまる。唐代には、馬祖下の帰宗智常が住した。宋代には黄龍派の黄龍慧南、門下の宝峰克文が住している。

(36) 祠山大帝のこと。張大帝とも。江西・江蘇・浙江・安徽一帯の地方において盛んに祭祀された神のこと。蘭溪道隆が日本に伽藍神として将来して以降、禅宗寺院の伽藍神として祀られた。また、「日本建長開山大覚禪師蘭溪和尚行状」には、道隆が祠山大帝との因縁により、日本に來朝した記

事が収録される。「蘭溪和尚行状」によれば、江西廬山の帰宗寺にも祀られていたらしい。祠山大帝については、二階堂善弘「祠山張大帝考―伽藍神としての張大帝―」（『関西大学中国文学会紀要』第二十八号、二〇〇七年）などを参照。

- (37) 明州（浙江省）鄞県の太白峰天童山景德禪寺のこと。中国五山第三位。西晋の永興元年（三〇四）に義興により開創され、唐の至徳二年（七五七）に伽藍を現在地に移した。南宋代には宏智正覚・虚庵懷敞・長翁如浄らが住し、日本からも栄西・道元が来山受法したほか、寒巖義尹や徹通義介も掛搭した。栄西は天童山の虚庵懷敞のもとで禅旨を究め、臨済宗黄龙派を伝えた。また、蘭溪道隆も日本に赴く直前には天童山に居住していた。明代の『天童山志』五卷、清代の『新纂天童山志』十卷などが存する。

- (38) 臨済宗虎丘派（松源派祖）の松源崇嶽（一一三三―一二〇二）のこと。処州（浙江省）竜泉松源の呉氏。密庵咸傑（一一一八―一一八六）の法を嗣ぐ。蘇州（江蘇省）陽山の澄照寺に出世開堂した後、蘇州の虎丘山雲巖寺や杭州の北山靈隠寺に住し、顕親報慈寺を開く。法嗣に運庵普巖・掩室善開・滅翁文礼・無明慧性らがいる。『松源和尚語

録』二巻が存する。

- (39) 杭州（浙江省）錢塘県の西湖南岸にある南屏山浄慈報恩光孝禪寺のこと。南山浄慈寺と略称される。五代周の顕徳元年（九五四）に呉越の忠懿王が創建して慧日永明院と称し、法眼宗の永明延寿が住して『宗鏡録』百巻を撰したことで名高い。北宋代には雲門宗の円照宗本や大通善などが住持し、南宋初期に浄慈報恩光孝禪寺と改められる。南宋中期には五山第四位に列し、曹洞宗の長翁如浄や大慧派の北磻居簡、松源派の虚堂智愚などが住持している。寺志として『勅建浄慈寺志』三十巻が存する。

- (40) 『仏日普照慧弁楚石禪師語録』巻二十に収録された「楚石和尚行状」に「師諱梵琦、字楚石、小字曇曜。明州象山人、姓朱氏」（続蔵一二四・一四七c）とある。

- (41) 『雪樵独唱集』四「説」の「大川説」（五山新五・二四八）

- (42) 『新編鎌倉志』巻三「建長寺」（白石克編『新編鎌倉志（貞享二刊）影印・解説・索引』汲古書院、二〇〇三年）

- (43) 『円通寺文書』「大覚禪師道号偈」（『佐賀県史料集成』古文書編第五巻、佐賀県立図書館、一九六〇

- 年、二二三頁)
- (44) 『蘭溪和尚語録』卷下「示円範藏主」(蘭溪全集一・九七b)
- (45) 『蘭溪和尚語録』卷下「虚堂智愚跋文」(蘭溪全集一・一五八a)
- (46) 『浙江通史』卷七「蘭溪県」に「名勝志・東陽記云、蘭溪県治西南六里。有蘭隱山故名以_二其横截大溪一名蘭溪_一」とあり、蘭隱山があることから、そこに流れる大きな河川を「蘭溪」と称したことが記されている。またこの地は、唐朝によつて蘭溪県(現在の浙江省金华市蘭溪市)が設置され、元貞元年(一二九五)には蘭溪州に改編され、洪武三年(一三七〇)に再び蘭溪県に戻っている。地名としての「蘭溪」は、浙江省の蘭溪が一般的に知られている。
- (47) 『環溪和尚語録』卷下に収録される「環溪和尚行状」に、「師諱惟一、環溪其自号。資州墨池賈氏子」(統藏一二二・七八b)とある。
- (48) 南宋代の地理志『輿地紀勝』一五七「資州」に「環溪。在資陽県北十二里、自簡之陽安一至_二県之龍山与思蓬溪合于江_一」とある。
- (49) 『増集統伝灯録』卷四「杭州径山石溪心月禪師」に「西蜀眉州人」(統藏一四二・四〇三c)とある。
- (50) 『東帰集』「偈頌」(『五山文学全集』第一卷、思文閣出版、十二頁)
- (51) 拙稿「蘭溪和尚語録」解題」(蘭溪全集一・五四七-五七七)参照
- (52) 『蘭溪和尚語録』卷上「建長寺語録」上堂121(蘭溪全集一・四〇a)
- (53) 西川石像は、嘉州(四川省)の大仏。西川は西の川、蜀(四川省)の地をいう。現在の四川省樂山市にある樂山大仏のこと。岩山を掘り、九十年かけて造られた巨大な弥勒菩薩の磨崖仏であり、唐の貞元十九年(八〇三)に完成した。高さは七十一メートル。『円悟仏果禪師語録』卷十六「拈古上」に「拳、雲門示_レ衆云、爾若実未_レ得_二箇入頭处_一三世諸仏在_二爾脚下_一、一大藏教在_二爾舌頭上_一。且向_二葛藤处_一会取。師云、崇寧土上加_レ泥、敢道、直得_レ滄山水牯触_二殺東海鯉魚_一、陝府鉄牛吞_二却嘉州大像_一」(大正藏四七・七九〇c)とあり、『仏光国師語録』卷三「相州巨福山建長興国禪寺語録」の「除夜小參」に「嘉州大像、阿阿大笑。黄梅石女、大叫_二蒼天_一。因_レ甚如_レ此。朱顔明鏡裏、古劍鬪_二髑髏前_一」(大正藏八〇・二五九c)とある。

- (54) 『蘭溪和尚語録』卷上「建長寺語録」上堂160(蘭溪全集一・四七a)
- (55) 石頭は、南宋代、臨濟宗楊岐派の石頭自回(不詳)のこと。合州(現在の重慶市合川区)石照の人。彭州(四川省)大隋山の南堂元靜に參じて法を嗣ぐ。合州の釣魚台に庵を結んで住した。『雲臥紀談』卷上「西蜀釣魚山回禪師」(統藏一四八・五a、b)の項に逸話を伝える。蘭溪道隆は同郷の先哲として一世紀前の自回のことを思慕していたらしい。
- (56) 釣魚山は、石頭自回が庵を結んで住した合州の釣魚山のこと。現在の重慶市合川区にある釣魚城。合州は河川が合流する地。
- (57) 巴州・遂州・果州・閬州はいずれも四川省内の地名。『石溪和尚語録』卷上「住建康能仁禪寺語録」の上堂に「巴蓬集壁、去_レ天一尺」(統藏一二三・三〇a)とあり、集州・壁州も四川省内の地名。『五灯会元』卷二十の処州連雲道能章に「曰、如何是就_レ肉刮_レ皮。師曰、嘉眉果閬、懷裏有_レ状」(統藏一三八・四〇〇c)とあり、嘉州・眉州も四川省内の地名。ちなみに石溪心月は眉州の人、連雲道能は漢州の人であり、ともに蘭溪道隆と同じ蜀僧である。
- (58) 『蘭溪和尚語録』卷上「建仁寺語録」上堂237(蘭溪全集一・六六b)
- (59) 『蘭溪和尚語録』卷上「建仁寺語録」上堂238(蘭溪全集一・六七a)
- (60) 鑑沱水は、西蜀涪州(現在の重慶市涪陵区)にある長江の入江。鑑沱・龍王沱・鑑湖とも呼ばれる。南宋代の地理志『輿地紀勝』卷一七四「涪州」に「鑑沱、在三州溉下、遇_レ旱祈_レ雨有_レ応」とある。鑑沱はすなわち鑑沱のこと。清代の『道光重慶府志』卷一「輿地志」「山川(涪州)」に「龍王沱、州西北一里、又名_二鑑湖_一。水漲三遊最險」(『中国地方志集成・四川府県志輯』五・巴蜀舍社)とある。
- (61) 銅柱灘は、西蜀涪州(現在の重慶市涪陵区)の長江の江中にある灘。南宋代の地理志『輿地紀勝』卷一七四「涪州」に「銅柱灘、見_二九域志_一。又周地圖記云、涪陵江中有_二銅柱灘_一。昔人於_レ此維舟見_二水底有_二銅柱_一、故名。銅柱灘、最峻急」とある。また、『道光重慶府志』卷一「輿地志」「山川(涪州)」に「銅柱灘。宇記周地圖記云、涪陵江中有_二銅柱灘_一。灘、昔日人於_レ此維舟見_二水底有_二銅柱_一、故名。灘最峻急」(『中国地方志集成・四川府県志輯』五・巴蜀舍社)とある。

(62) 『蘭溪和尚語録』 卷下「虚堂智愚跋文」(蘭溪全集 一・二五八a)

(63) 岷峨は、四川省にある岷山と峨眉山のこと。岷山とは四川省北部の甘肅省との境にあり、北西から南東に延びる山脈で、その南端に峨眉山がある。岷山は山頂に残雪があるため雪山ともいう。峨眉山は四川省峨眉県の西南にあり、岷山から延びて大小金川と岷江との分水嶺となっている。峨眉山は仏教では光明山、道教では虚靈洞天などともいい、山西の五臺山、浙江の普陀山と並ぶ中国三大霊場の一つでもある。

(64) 『延宝伝灯録』・『本朝高僧伝』・『扶桑五山記』以外の義翁紹仁の關係史料をいくつか挙げておく。『仏光国師語録』「小仏事」の「建仁長老入祖堂」。「白雲青山児、青山白雲父。白雲去而青山隨、青山走而白雲不_レ住。義翁面目儼然、正是子帰就_レ父」(大正藏八〇・一七五b)とあり、ここで言う建仁長老は義翁紹仁であったことが知られる。『大休和尚語録』「仏祖讚頌」に「大覚禪師・元庵・義翁・無学・大休五頂相」と題した「宗分正派、枝同本根。拈_レ槌豎_レ拄各称_レ尊。傾蓋相忘、目擊道存。夜半金烏出_二海門_一、重見_一花開_二五葉_一。大家扶_二豎破砂盆_一、爲_二守殿_一処_レ讚」(大

日仏九六・二三八b)という讚文が収録されており、大休正念が蘭溪道隆・元庵普寧・義翁紹仁・無学祖元と自分を含む五人の頂相に対して北条時宗の爲に讚している。五人ともに、北条時宗が参学した渡來僧である。建長寺所藏『巨福山建長興国禅寺諸回向並疏冊子』「巨福山建長興国全寺年中諷經并前住記」六月条に「初二 普覚禪師忌」とあるので、六月二日の示寂が伝えられている。

(65) 『延宝伝灯録』 卷十六「相州建長寺沙門紹仁伝」(大日仏一〇八・三三五)

(66) 『本朝高僧伝』 卷二十一「相州建長寺沙門紹仁伝」(大日仏一〇二・二九六)

(67) 『扶桑五山記』「建長寺住持位」(玉村竹二『扶桑五山記』、鎌倉市教育委員会、一九六三年、一一四頁)